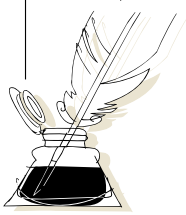
連載エッセイ189

人生讃歌

今日は



貧農に生まれたからというわけでもないだろうが、ぼくは六歳ごろ朝起きて親に「おはよ」と言う習慣がなかった。それで何となく黙っているのも間が悪く、誰にともなく「いい天気だね」とか、冬だと「寒寒寒」と呟いたものだ。

小学一年に入学した朝、教壇に立った谷本尋子先生に向かい、ぼくらみんなで「お早うございます」と言い、帰りにも「先生さようなら」と言ったのが、本格的な挨拶の出発だった。それまでも道路で村の小父さんらに会うと「こんちは」くらい言ってた気がする。黙っていると「おまえ口がないのか」と、どやしつけられたからだ。

十三歳で街の中学へ転校、親戚の八人家族の家へ居候。朝起きると板間へ正座し、両手をついてご両親に挨拶。登校時と帰宅時、就寝時は立ったまま礼をして挨拶。もちろんそこの六人の子供にも毎日「お早う」「行ってきます」「ただいま」と言った。粗雑なぼくもここで鍛えられた。助かった。

高校の寄宿舎に入ってまず先輩から叩き込まれたのが礼儀と挨拶だった。先輩に「いいかお前ら、高校へきて勉強だけしてればいいと思ったら大間違いだぞ」と怒鳴られた。そして先輩はぼくら一年生が初めての夏休みに実家へ帰るとき「いいか、実家へ帰ったら両親の前へ両手をつき、お父さん、お母さん、ただいま帰りましたって言うんだぞ、わかったか」と喚かれた。仕送りしてもらってるんだからと言った。

それでぼくは夏休み実家へ着くと上がりがまちへ四つん這いになって家族に「ただいま帰りました」と頭を下げた。だが家族はぼくのいままで見たことのない異常な行動に驚いたのか何も言わず、みな口をあけていた。この子、高校へ行って頭が変になったのだ、という顔つきだった。ぼくは次の帰省から土下座をやめ「ただいま」と言うだけにした。

高校の寮での三年間は、勉強より先輩への挨拶と礼儀に気をつかって疲れた。寮には七十人いて、一日に廊下などで同じ人に何回会っても「今日は」と言わなければならないため、多い日は一日に百回言ったこともある。ありがたかったと言うべきだろう。ぼくも三年生になると一応、上級生らしくカッコをつけ、下級生に挨拶を躾けたのは言うまでもない。

★

それから六十五年ほどたち、ぼくは老人であった。ある日の混んだ電車の中で、次の駅で降りようと通路を出口へ向かって歩いていて男の人にぶつかり「ごめんなさい」と言った。するとその中年男性が「そんなことでいちいち謝るんでないよ」と言ったので、びっくりした。何かまずいことをしてしまったような気がして、挨拶って、こんなに厄介なもんだったかな、と思った。

いつかの昼どきだった。友達ら三人でレストランへ入った。混んでいて二人席しかあいていないため、横の四人用テーブルで一人で食事をしながら携帯電話をのぞき込んでいた三十歳くらいの男性に「すみませんが、椅子一つ借りていいですか?」と聞いた。するとその男性が「勝手に使いなよ、俺のじ

【小檜山 博 文学館が開館】2020年11月1日から北海道滝上町の文化センター内に、生原稿、掲載誌、文学賞、日記、写真、創作メモ、新聞記事など、70年にわたる活動資料の展示が開設されました。　紋別郡滝上町栄町（滝上町文化センター内）　☎0158・29・3735　10:00～17:00　年末年始休館（12/31～1/5）
アクセス：札幌駅からバスで約4時間30分、旭川駅からバスで約2時間30分　紋別空港から車で約40分

やないんだからいちいち話しかけないでよ」と穏やかな声で言ったので、びっくりした。まずいことをした、と思った。携帯電話では仕事中だったようで申しわけなかった気がした。ぼくは椅子を借りながら「ありがとうございます。すみませんでした」と言った。

★

年をとったぼくの感覚が古びたせいもあると思い、つい辞典をのぞいてしまった。粗野なぼくがよく使う「済みません」は、相手に申しわけないと思うときの、相手を気づかったのを主眼にした謝りや礼だと書かれていて納得する。「有難う」は有るのがむずかしいほど貴重で尊いゆえ感謝する、嬉しく思うで、自分の感謝を重点にした言い方だと辞典にある。思うに、生きている間は一日に最低二回以上は使わなければならない、言葉の中で最も重要なものとなる。「お世話様」は他人が自分に力を尽くしてくれた意味だが、それをその人にたいする感謝を表す言葉として使っているわけだ。すばらしい。「お早うございます」は相手が早く来たことを讃える挨拶。得心がいく。「今晩は」は「今晩はすばらしい晩で何よりです」の下を省略した挨拶。「左様なら」は、これでお別れにしましょうと言う意味と、もう一つ、また会える日までお元気でありますように、としばらくの別れを惜しむ意味の言葉だというから凄い。これは奥が深い。「今日は」は「今日はご機嫌いかがですか?」の下の十字を略した言葉で、相手の気持ちや状態を気づかいうかがう、人間関係の原点を支える言葉であった。こうしてぼくは挨拶が食べ物や空気と同様、生きるうえで欠かせないもの、かつ挨拶は相手を認知する最も良い手段だと認識したのである。

★

この早春、妻と手稲山の麓を流れる琴似発寒川べりを散歩中、川岸に立って流れを見ている七十歳くらいのご夫婦に会った。その後ろを通るときわれわれが「今日は」と言うと二人が振り向いて「今日は」と言った。そして奥さんのほうが「蕗の薹がきれいですね」と微えんだ。ぼくは「間もなく鶯が鳴きますね」と言って歩き出すと、ぼくの妻も「ごめんください、さようなら」と言った。背後で男性のほうが「お声をかけてくださり嬉しいです」と言った。川の音が澄んでいた。 Ⓙ

挿絵／中江潤一

■小檜山　博(こひやまはく):作家。神田日勝記念美術館名誉館長。1937年・北海道滝上町生まれ。『出刃』で北方文芸賞受賞。『光る女』で泉鏡花文学賞と北海道新聞文学賞受賞。1997年・札幌芸術賞受賞。2003年『光る大雪』で木山捷平文学賞受賞。2005年・北海道文化賞受賞。2007年・北海道功労賞受賞。